

水戸藩の撞鐘徴収政策

圭 室 文 雄

(一)

水戸藩は江戸時代を通じて二回にわたり廃仏毀釈政策を実施している。第一回は寛文6年(1666)藩主徳川光圀の手によって行なわれた。領内2377か寺のうち処分の対象になったのは、現在の史料で判明するだけでも、1098か寺をかぞえるが実際はもっと多くの寺が破却されたと思われる。一方神社に対してもその統制の手がのべられた。元禄9年(1696)領内の村落に一村一鎮守の制度をしき、村の鎮守社から仏教的要素を追放するため、仏教的神体の追放、神社の管理人の確定、八幡社の整理などの諸政策をうち出していった。しかし寛文・元禄期の寺社整理は、朱子学的合理主義に立つ、あくまでも神仏習合の否定、寺社の経営の安定化に力点を置いた政策であって、廃仏毀釈というよりは、経営不安定な寺院の整理の段階であったといえよう。

これに対して、第二回目の天保段階の水戸藩の宗教政策は、まさに廃仏毀釈政策といえる。この宗教政策は、藩主徳川斉昭(1800—60)と藤田東湖(1806—55)・会沢正志斎(1782—1863)などの学者の意見が主流となり推進されたもので、後期水戸学の思想を軸とする強烈な廃仏思想の展開であった。天保3年(1832)から弘化元年(1844)に実施されたこの社寺改正では、およそ次のような改革が行なわれた。第一は寺院整理、第二は撞鐘の徴収、第三は神社の唯

一神道化，第四は氏子帳の作成などである。これらの中でも，とりわけ他に見られない特色のある撞鐘徴収政策について検討を加えてみたいと思う。

(二)

天保13年（1842）12月，水戸藩は領内寺院と山伏に対して，濡仏・撞鐘の提出を命じた。

海岸防禦の儀御急務に候所，何れも承知たてまつり候通，御勝手も御不如意にて思召之様にも御備御行届に相ならず候ゆえ，御領中にこれある濡仏・撞鐘等にて，大炮などの利器御製に相成り候に付ては，人々御国恩之程相弁さし出され申すべきこと⁽¹⁾

と，幕府が海防政策を打ち出してきた機会をとらえ，大炮の資材を得るため領内の撞鐘・濡仏の徴収に乗りだした。藩財政に負担をかけずしていかに大炮の資材を仕入れるかを検討した結果，寺院の撞鐘に目をつけた。江戸時代の寺院は檀家制度を足場にして経営は安定しており，撞鐘の大きさ・数量はその格づけとしての意味を持っていた。とくに大寺院などでは，撞鐘・濡仏・半鐘・鰐口など，数多く取りそろえている例が多い。もとよりこれらは檀家の負担でまかなわれており，経常費とは別に寺院から収奪されていたものに外ならない。そしてこれらの仏器・仏具の類が檀家に直接還元される効用は何もないのである。その意味において，大炮の材料として仏器・仏具の徴収を命じた水戸藩の着想はすぐれていたといえよう。つまり農民から直接年貢増徴という形で収奪することなくして海防のための大炮作成が可能であり，このことはむしろ農民の抵抗なくその政策を推進させることができると判断したのである。

ところが，寺院側にとっては，濡仏・撞鐘などの徴収はまさに驚嘆すべきことであった。藩ではすでに無住寺院や大破寺院の処分を打出していた。特に農民の経済的負担になる寺院を破却の対象としていたことを思えば，寺院側としては，天保3年（1832）から行なわれている水戸藩の廃仏毀釈政策の一環として身にせまるものと受けとめざるを得なかったのである。

水戸藩は撞鐘徴収政策が海防のためであることを強調する反面，仏器・仏具

の鑄潰しの例が過去にもあることを指摘し提出をせまった。

京の大仏等鑄つぶし、諸人のためにあそばされ候儀も、これあり候へば、御気毒ながらぬれ仏等は石にかへ候ても相済申すべし、また鐘の儀も板木にかえ候ても、相成べく候へば、右様の品々は、このたび、そのまま指置かれ候とても、兵乱などの節にいたり候へば、奪はれ候は指見に候へば、御菩提所をはじめ、御国中一様御引上げ、石仏板木に御かへあそばさるる条、出家ながらも日本の国恩を弁じ、いずれも早々指上候やういたすべきこと⁽²⁾

と、濡仏を石に、鐘を板木にかえ、濡仏・撞鐘を提出することは、出家が国恩に尽す道だとさとしている。さらに撞鐘徴収策に速やかに応じた寺院には恩典を与えている。

石仏代金・板木代金は下され候こと、また早々差上げ候ものへは、御褒美くださるべきこと⁽³⁾

と、石仏・板木の代金を藩主側から与えるとしている点、注目に値する。つまり奨励金とでもいえようか、たとえば真言宗の領内きっての大寺である常葉村神崎寺は、白銀十枚と紋指廿疋を藩から与えられている。その理由は、

このたび異賊防禦の利器御製作のため、寺院にこれあり候ぬれ仏・銅鐘などさしあぐべき旨相達候儀につき、その院儀、御国恩をわきまへ、さとしかた行届、すみやかに指上げ候段、公聴に達し候処、御満悦に思召され、
目録の通り、下しおかれ候旨、仰せいださるものなり⁽⁴⁾

とあり、神崎寺が末寺に水戸藩の意向を伝達していること、さらには撞鐘の提出に積極的に応じたことがその理由である。この時神崎寺は撞鐘一つ、鰐口三つを提出した。このほか同様のことは杉山宝鏡院にもいえる。つまり水戸藩は本末制度を利用しつつ、また本寺を懐柔しつつその政策をおしすすめていっている点まことに巧妙といえる。

また一方では、仏像・鐘の徴収にあたって農民の反対を防ぐことにもかなりの力を入れている。信仰を集めている仏像の扱いには神経も使ったようであるが、海岸警備の費用を農民が負担すれば、過重なものであることを強調するこ

とも忘れてはいない。とくに近年不作であるとすれば、農民が寺院の仏像・鐘の徴収に反対する条件はほとんどなかったといっても過言ではあるまい。

御領中の儀は、年々に熟作いたさず、をりから御収納も相減じ、思し召しの様にお届に相ならず候につき、御よんどころなく、御領中寺院の撞鐘・銅仏をもって、大砲にあそばされ候思し召しにて御急務の御用のむね、寺院どもへ御申含めに相成り、尤村々時を伝へ候撞鐘これなくしてはさしつかえ候につき、大郷は一か村に一つ、小村はもやひに御さしおきに相成り、その余りは御引上にて大砲御⁽⁵⁾鑄立に相成り申候

と、農民にこの政策に反対する隙を与えていない。つまり農民に直接負担をかけるようなことではなく、寺院の鐘・仏といったような日常生活から離れたものから取りあげていくことを明示している。寺院経済の節減を求める藩の姿勢もまたうかがえる。時計がわりとして貴重であった時を知らせる鐘については、大きな村には一つ、小村ならば何か村か共同で一つ残すよう指示しており、農民に対するその配慮は細かい。

水戸藩のこの撞鐘の徴収について、当然のことながら領内寺院側から反対の火の手はあがった。関東十八檀林の一つである浄土宗常福寺と、領内中本寺格で檀林寺である天台宗の薬王院がそれである。常福寺は芝増上寺、薬王院は上野寛永寺と、それぞれ本山の力を背景に、水戸藩の宗教政策に正面から対決して来た。まず常福寺からみてみよう。天保14年（1843）1月、常福寺はこの政策に反対の意向を早速水戸藩の寺社奉行に申し入れた。

仏像鳴鐘等檀家より襦布有之候廉々は、御寺并諸末寺にいたるまで、ことごとく惣録所増上寺え相届け候節、国家豊饒、除災来祥、御国恩報謝之祝禱、怠慢なく永久相続はもちろん、若破損等これあり候はば、きと再興いたすべき旨、同所より嚴重の達方これあり候につき、一己の存意をもって録所え伺方もあいなりがたき儀は、諸檀林一同古来の規定に御座候、このたび御達の趣、檀林え申談、録所え伺相立候はば、公儀え伺にも相成べき筋、万々御称号にも相拘り候儀も御座候ては、あいすまざる儀と深く恐慮つかまつり候⁽⁶⁾

と、まず増上寺の権威を前面に押し出し、仏像・撞鐘が檀家のありがたい布施でまかなわれていることをあげ、仏像の参拝や鐘を撞く意義は、国家豊饒・除災来祥・国恩報謝等すべて幕藩体制維持にあるとして、政策の撤回を求めた。もし政策の変更がない場合は、「御称号に相拘り候義」があるやもしれぬときめつけた。増上寺の背景には幕府があることを暗にほめかしている。しかし藩側は屈することなく再度提出を要請し、日限も2月15日に限り回答をせまった。これに対し常福寺は2月8日。

御寺の儀は御菩提所ゆえ、格別御国恩を深く蒙り感佩たてまつり、尊霊様方御菩提の御追福はもちろん、御武運長久御封内安全の祝禱を怠慢なく申上げたてまつり候、住持職にて軍器御用の料に濡仏撞鐘等差上げの儀、何とも申上げかね、只々痛心恐れ入りたてまつり候、さりながら思召しにて、御引上に相成り候儀は何とも申上げず候、併御仁恕の程ひたすら拝願たてまつり候⁽⁷⁾

と申しのべた。即ち藩主徳川家の菩提寺であること、これ迄藩政推進のための祈禱を積極的に行なって来たこと等を楯に例外として認める様強く要望した。さらに同月10日にも、水戸藩の寺社役青木又四良に書面で次の様に申し入れをしている。

和漢において仏像・仏具を毀り、通用錢あるいは農具等に作り候先蹤は、粗史伝に相見へ候、いずれもその後災害不祥のことともこれあり候、おそれながらこのたびの儀、右に類例候はば、深く痛心恐入次第、その上仏像等破滅のために指上候ては、自身に破滅いたし候も同然、仏家の逆罪も⁽⁸⁾とも戒慎すべき儀に候

と、古事を引きながら、仏像・仏具の破却が災害につながることを説明している。そして仏像・仏具の破棄は僧侶独自の判断ではできないことも併せ強調していることも注目すべきであろう。つまり本山の意向を無視できない点を強調することは勿論、住持交代の節には藩の寺社役も立合ったのではないかと開き直った。

しかし水戸藩の姿勢もまた意外に強かった。常福寺のみを例外として認める

ことはできないとして、2月16日次の様な布達を出した。

このたびは御領内一同の儀につき、上の思召をもって濡仏・撞鐘等の御引上にあいなり候間、その旨相心得られ、一派も洩れざるよう通達いたすべく候⁽⁹⁾

これは水戸の寺社奉行から領内寺院に布達され、直接江戸の在住の藩主に常福寺が交渉しても無駄であったことを明示した。これに対してまた常福寺は寺社奉行に申し入れた。

瓜連旧跡の儀は勅願所なり、かつ神君様（家康）お取立の檀林、公儀御菩提の儀につき、今般思召を以って撞鐘お引上の御達しは、定て御除きの儀と存じ候⁽¹⁰⁾

常福寺は天皇の勅願寺であること、家康の定めた関東十八檀林の一つであること、藩主徳川家の菩提寺であること、以上三点を強調し撞鐘徴収の際は例外にしてほしいと再度主張した。しかし藩の撞鐘徴収政策は強力に押しすすめられていった様である。5月ごろから領内の諸寺院より濡仏・撞鐘が続々と徴収されていった。

常福寺の撞鐘が徴収されたのは天保14年（1843）9月のことである。9月8日寺社役所の口達によれば、

瓜連最寄りの方角の撞鐘のこらず御引上げあいすまし候については、旧跡（常福寺）撞鐘も近々御引上げにあいなり候条、そのむね相心得らるべき旨相達され候⁽¹¹⁾

とあり、常福寺の撞鐘徴収に近いことを通告している。一か月後の閏9月9日に常福寺の撞鐘徴収が実行されたようである。

閏九月八日瓜連村庄屋馬之助方江、郡手代兩人あい越され、人足五拾人明朝差出さるべき由につき、村役人ども何の御用に哉と承り候処、御用之儀は明朝相達すべきとの事ゆえ、翌九日朝人足相揃え候処、今日常福寺の撞鐘御引上げに相成候間、その段寺へ相断ずるべき旨、申付られ候ニ付、申通候やいなや人足取掛り、引落し早々寺外壱町余南の畑え引出し打破りかけ候処、金性よろしく、かつ巨鐘ゆえ、人足どもの手に余り、太田より鍛

冶職を呼び寄せ、六日夕刻迄ニ菰包に致し差送り候、目方凡三百貫目と申
伝え候得ども、吹散もこれあるや、正味二百四拾五貫目これあり候よし、
庄屋より申出候、右撞鐘は第十九世白誉而通代寛文四年鑄替、経り三尺、
竜頭より長サ五尺、鳴韻御領内第一にて、今年まで百八十年の内、六時撞
せ来り候処、一時に滅却致し、院代并役者どもも、当春來過分の心配水沫
と相成り、かつ数村の者ども深く相嘆候⁽¹²⁾

とあり、これで常福寺の撞鐘が徴収されていく様子がよくわかる。これによる
と、村民に事前通告をしていなかったようである。「鳴韻御領内第一」といわ
れる鐘に愛着を持っていた農民達の抵抗を考慮したものであろうか。またこの
鐘が大きく二百四拾五貫もあったため専門の鍛冶屋を呼んで潰したようであ
る。この撞鐘徴収政策が、寺院側の強い抵抗や、周辺の檀家の反対には関係な
く強引に実行されていったことはその特徴でもあり、またそこに藩主の徹底し
た廃仏毀釈の思想をみることができる。

水戸藩の強引さに屈した形になった常福寺は、この鐘の問題も含めて藩の廃
仏毀釈政策に対する批判を増上寺に伝えた。弘化元年（1844）2月増上寺は幕
府に上訴した。内容の要点は次の五つである。第一は撞鐘徴収に対する抗議、
第二は常福寺兼帯の御靈屋別当寺（円浄寺）が破却され、唯一神道に改変され
たことに対する抗議、第三は光圀によって作られた藩主菩提寺の向山常福寺の
処分に対する抗議、第四は天保の寺院整理で多数の常福寺末寺が処分されたこ
とへの抗議、第五は僧侶が多数処分されたことに対する抗議であった。

（三）

今一つ天台宗薬王院の場合を見てみよう。『南郡村々撞鐘等員数書』によれ
ばこの寺は

- 一 撞鐘壺ツ 但高三尺五寸
指渡貳尺貳寸
輪厚三寸貳分
- 一 鰐口壺ツ 但指渡五尺

一 同 壺ツ 但指渡四尺五寸

一 濡仏壺ツ 高九尺四寸

れんげざ廻り 壺丈四尺⁽¹³⁾

と、撞鐘一つ、鰐口二つ、濡仏一つを書上げている。撞鐘・鰐口・濡仏ともとりわけ大型である。薬王院も水戸藩に対して、これらの徴収についてはとりやめてくれるよう再三要請したが、藩の態度は変わらず、一向らちがあかなかった。そこで天保14年（1843）正月には、

御用捨の儀、再三願ひ上げ候へども、一向御取用ひこれなく、願書御差戻しに相ひなり、まことに当惑至極につかまつり候、最早他宗之寺院においては、御請申上候族もこれある由、然る上は拙寺とも自力におよびがたく、やむをえずこの段言上たてまつり候、仏体・法器は法務の預りの処に御座候間、格別の思し召しをもって、准后宮様によりお声かけさせられ、下しおかれ候様願ひ上げたてまつり候⁽¹⁴⁾

と、再度その政策のとりやめを要望しがかなえられず、このうえは上野寛永寺を通じて藩当局にその政策転換を迫る、と藩に通告した。そのご薬王院は寛永寺に働きかけ、これを受けた寛永寺も水戸藩にはかなり強硬な姿勢でのぞんだ。

往古より仏像・仏具破却いたし候もの種々現報を請け候たぐひ、和漢とも先蹤あまたこれあり、はなはだもって御心掛の義に思し召され候、かつ撞鐘の儀は僧侶の威儀をととのへ、晨昏読誦之規矩に相成、その上昼夜六時を報告いたし、国中の利益も少なからず候処、今般多年安置の仏像・銅鐘等一時に廃滅におよび候段、何にも御悲歎になられ候（中略）数年来有り来り候露仏撞鐘など、これまでの通り差しおかれ候ようなられたく、ひたすら御頼み思し召し候

と、仏像の破却による因果応報、とくにその災厄を説く一方、撞鐘の効用を強調して由来正しき仏器類の取り上げはやめるようにと迫った。しかしやはり水戸藩の態度は強硬であり、

御国政御急務よんどころなく、仰せ出され候儀にて、いまさら御猶予等の

儀は、所詮相ひなりがたき筋にこれあり候、この上表むき御使などこれあり候へば、右御急務の意味など、委細御答へにも相ひなるべく候⁽¹⁵⁾と、その申し出をはっきり断わっている。

浄土宗常福寺、天台宗薬王院の抵抗は、藩当局において予想しないことではなかったにしても、増上寺、寛永寺の両門跡の力には藩としても相当圧倒されたようである。しかし例外を認めることは天保段階の廃仏毀釈の坐折を意味した。そのため、常福寺・薬王院一件が一段落したところで、水戸藩は再度この二寺院に対する批判を公けにした。

御領内寺院いづれも速に御請申上げ、追々銅鐘等差上候処、天台・浄土両宗のみ御請遅々いたし候、右はほか宗旨とも相違の義に候えば、却て速に御請申上げず候ては、ほか宗門の氣受にも拘り候間、この上両宗より御声掛り等儀嘆願申立候むきもこれあり候⁽¹⁶⁾

と、天台宗・浄土宗は積極的に藩の政策に協力すべきであるにも拘らず、門跡のお声がかかりを利用するなど以てのほかであるとしており、水戸藩の強烈な対応をみることができる。

(四)

水戸藩が行なった撞鐘徴収政策は、常福寺・薬王院のねばり強い抵抗にあったが、全領的にみればどうであったか、その実態について検討を加えてみたいと思う。

まず領内で徴収された撞鐘などの実数についてみてみよう。現在水戸彰考館に所蔵されている『水戸領四郡撞鐘等員数書』にはこの時取り上げられた領内寺院の撞鐘等がすべて書き出されている。これは天保14年(1843)の撞鐘徴収の史料で、「南郡村々撞鐘等員数書」「東郡撞鐘等員数書」「西郡村々撞鐘等員数書」「北郡撞鐘等員数書」の四冊の書上げからなっている。村名・寺名・撞鐘・半鐘・濡仏・金仏・伏鐘・鰐口の数量、大きさ寸法などを詳細に書き、それぞれの冊ごとに数量が書き出している。次に掲げる表はこの『水戸領四郡撞鐘等員数書』を整理して表示したものである。

水戸藩に徴収された撞鐘

	撞鐘	半鐘	鰐口	濡仏	水金	そう ごん	金仏	伏鐘	合計
南 郡	74	59	109	4	—	—	—	—	246
東 郡	70	47	33	1	—	—	—	—	151
西 郡	88	71	118	2	1	1	—	—	281
北 郡	91	88	41	—	—	2	1	2	225
合 計	323	265	301	7	1	3	1	2	903
・ %	35.77	29.35	33.33	0.78	0.11	0.33	0.11	0.22	100.00

これによると水戸藩は、撞鐘、半鐘、鰐口を大砲鑄造用材徴収の主眼として
ることがわかる。撞鐘は323個で総数の35.77%を占め、半鐘は265個で29.35
%, 鰐口は301個で33.33%を占めている。つまりこの三つを合わせると98.45
%となりほぼその大勢を占めることになる。

水戸藩の廃仏史料として詳しい『筑波根おろし』によると、天保14年
(1843)「この年諸寺社の鐘をお取り上げこれあり、大砲を鑄させ給ふ。その
鐘の数凡そ六百余なりとぞ」と見えている。撞鐘、半鐘、伏鐘を合計すると
590個なのでほぼこの数字と一致する。『水戸領四郡撞鐘等員数書』は、水戸藩
が領内から取り上げた数量とみて間違いなさそうである。民衆の信仰をあつめ
ていた金仏の徴収はほとんどできなかったようだが、わりあい手のつけやすい
撞鐘、半鐘、伏鐘など、鐘と鰐口の徴収にはかなり効果をあげているといつて
良い。

次に撞鐘徴収の規準は何であったかについて若干考察してみよう。『水戸領
四郡撞鐘等員数書』にみても、その規準は明確ではなく、たとえば鐘の種
類(撞鐘、半鐘、鰐口など)によって保存と徴収に分けたという例はない。で
は鑄造年の古いものは保存したかといえども否である。また鐘の大小も問
題になってはいない。とすれば全く無差別にすべての鐘を徴収したと考える方

が正しいといえそうである。幕府の海防政策を軸に、大砲鑄造のためという大義名分で領内寺院の鐘をすべて徴収していったといえそうである。勿論そこには若干の抵抗があったが、結果としてはかなり多くの鐘を徴収するのに成功している。

先述の常福寺と薬王院の抵抗はその後も根強く、増上寺・寛永寺の宮門跡を動かし、幕府に対して水戸藩の廃仏毀釈政策批判書を提出した。幕府もこれには重い腰を上げることになり、弘化元年（1844）4月16日老中阿部正弘は、水戸藩家老中山信守を幕邸に呼びつけ、水戸藩の廃仏毀釈政策について問い糺した。その20日後の5月6日、幕府は水戸藩主徳川斉昭に謹慎を命じた。これにより水戸藩の廃仏毀釈政策は挫折をよぎなくされた。斉昭は小石川の藩邸から駒込の別邸に移ることになったが、そのご彼は世子に書を送っており、その中で次のように記している。

僧侶どもへは一切御懇意ニこれなきがよろしく候。もっとも此方にて御策これあるか、または時に取て事を聞出し候杯申時は、格別近づき候へば、まずは害が多くこれあり候、わけて坊主は奥向の者だましやすく候ゆえ、奥より取り入れ候へば、御油断⁽¹⁷⁾これなきがよろしく候

常福寺・薬王院の抵抗が幕府の大奥を通じて行なわれ、それが自分の失脚の原因であったことをのべ、謹慎を命じた幕府を遠廻しに批判している。水戸藩の撞鐘徴収政策は、一定の成果をおさめながら、最後には藩主の失脚という結末で終わってしまった。しかしこの段階で水戸藩ほど徹底した廃仏毀釈を行なった藩はなく、寺院側がうけたダメージは相当なものであったといえよう。藩主斉昭を失脚に追い込んだ幕府が、わずか数年後には大砲鑄造のため全国の寺院から撞鐘を徴収することになろうとは、この段階では想像もつかないことであった。

注

- (1) 『御改正并回復祕録』 茨城県常陸太田市瓜連町常福寺蔵
- (2) 『水戸藩史料別記』 卷16
- (3) 同 上
- (4) 『筑波根おろし』 明治大学図書館所蔵
- (5) 『水戸藩史料別記』 卷16
- (6) 『御改正并回復祕録』 茨城県常陸太田市瓜連町常福寺蔵
- (7) 同 上
- (8) 同 上
- (9) 同 上
- (10) 同 上
- (11) 同 上
- (12) 同 上
- (13) 『南郡村々撞鐘等員数書』 水戸市彰考館文庫所蔵
- (14) 『水戸藩史料別記』 卷13
- (15) 『水戸領四郡撞鐘等員数書』 水戸市彰考館文庫所蔵
- (16) 『水戸藩史料別記』 卷22
- (17) 同 上